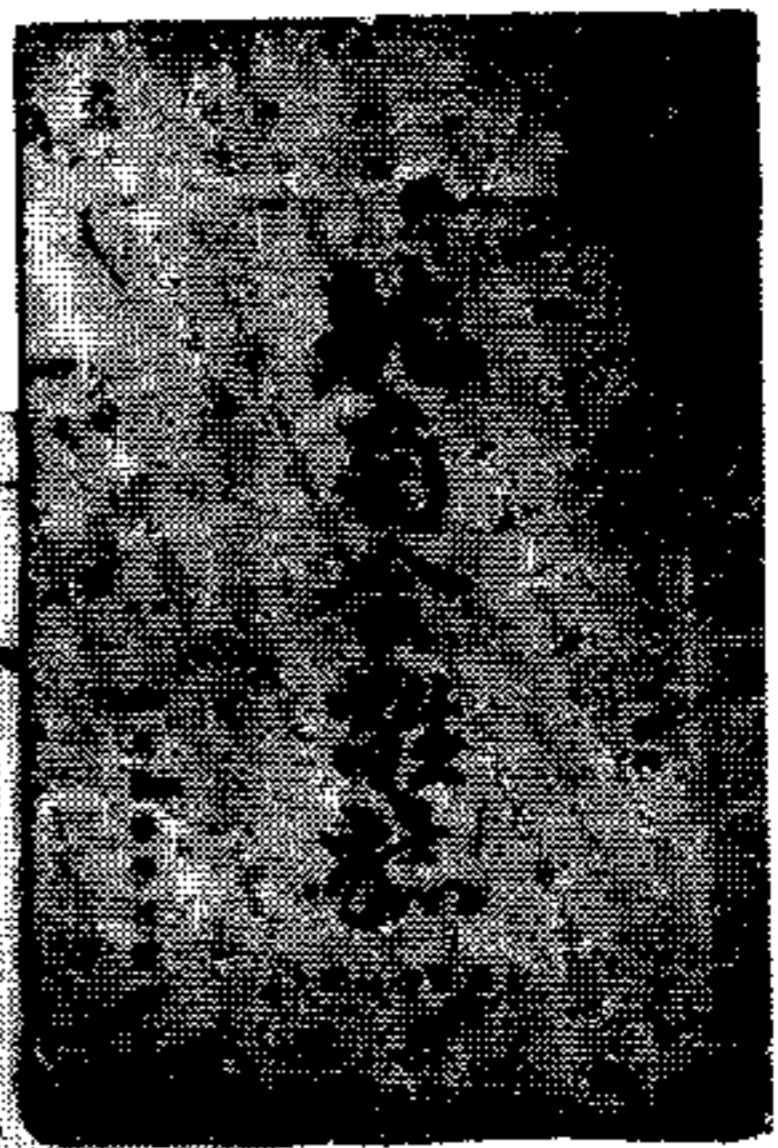


奉事至尊  
情死論



# 奉事至尊

大川周明

〔解説〕一、「奉事至尊」は、大川博士が郷里莊内の老友山口白雲氏（同氏に関しては第一巻「安楽の門」（私は何うして大学に入ったか）参照）の主筆する雑誌「新庄内」に寄せられた論文である。同氏は自らの序文を附して小冊（四六版・二十三頁）とし昭和十一年（一九三二）五月刊行頒布した。題字及び署名は博士の書である。

一、「竜南会雑誌」は博士の出身校である第五高等学校（明治四十年卒業）竜南会の機関誌である。明治三十九年（一九〇六）十二月二十一日発行第百十八号には、当時五高在学三年生であった博士の二論文が載っている。一つは巻頭論説として「小楠先生を懐ふ」（大川周明）十頁（未完）であり、一つは雑録欄に「情死論」（斯禹生）四頁である。

一、「小楠先生を懐ふ」に後年補筆されたものが「横井小楠の思想及び信仰」（第一巻「日本精神研究」）である。ここに収録した「情死論」は筆名が「斯禹生」としてあるがこの「斯禹」の雅号は、揮毫その他に於て博士が晩年まで愛用された署名である。

一、究道一途の竜南時代については博士自らによって、「横井小楠の思想及び信仰」に於て、「安楽の門」（四、私は何うして大学の哲学科に入ったか）に於て白伝されているが、この「情死論」は錦上さらに花をそえる貴重な資料である。

一、尚ほ同雑誌の雑報欄には、五高栗野事件として若き博士が当時勇名をさせた栗野転校事件顛末報告が載っている。

## 奉事至尊

## その一

## 一 誠に綜合さるる万殊の道德

右手に方をゑがき、左手に円をゑがけば、方円兩つながら成らぬ。天に雙日なく、地に二王ない。吾等の生活に於いても至つて尊きものは唯だ一つでなければならぬ。

至つて尊きものを奉じて、身も心も之に傾けつくす時、生命本来の面目、初めて躍如として現れ来る。一事を奉じて他意なく余念なき心意は、古人の謂はゆる至誠である。人々個々みな自家の特色を吾等は個性と呼ぶ。そは一ありて二なき個々の特殊相にして、断じて他の模倣を許さざるものである。此天上天下独一无二の面目を、実行上に發揮して、人々個々の存在が初めて意義と価値とを与へられる。

而して中庸の記者が『唯だ天下の至誠、よく其の性を尽す』と道破せる如く、その従事するところに専心一意なる事によりてのみ、個性の実現は可能である。一切のもの、これを本質の上よりいへば、個性より強きはない。個性を失ふは、其の者自身の滅亡である。

されば同じく中庸に『誠は物の終始、誠なければ物なし』とあるは、真に鉄崑崙の一句である。近時米国の哲学者ロイスの如きも、全心を一目的のために奉事する忠誠の精神を以て、道德の本原、全道德律の充実なりとし、忠誠の

一語、よく万殊の道德を綜合すると主張して居る。

### 空虚なる生活は動揺不安の母

誠は實在の相である。それは純一にして無雑、眞實にして無妄、進展にして不息、純動にして不断である。一切の動揺不安は、たゞ誠を欠くが故に起る。誠を欠くとは二心を抱く事である。一切の見苦しきものゝうち、二心を抱くより見苦しきはない。二心あるが故に、左顧右眄するが故に精神に間隙がある。間隙あるが故に生活が充実せぬ。而して空虚なる生活こそ、一切の動揺不安の母である。

もしこの動揺不安を掃蕩せんとするならば、必ず唯一無上とするところのものを把持せねばならぬ。唯一無上なるが故に、全力を挙げて奉事せざるを得ぬ。全力をあぐるが故に徘徊顧望の邊がない。その奉事する処、即ち自己の天地にして、また他あるを知らぬ。此時に於て人々個々、おのずから精神の安住を得て、一心初めて落在する。

### 二宮翁夜話に曰く

『才智辨舌は人に説くべしと雖も、草木禽獸を説くべからず。鳥獸は心あり、或は欺くべしといへども、草木を欺くべからず。夫れ我道は至誠と実行となるが故に、米、麦、蔬菜、瓜、茄子にても、蘭、菊にても、皆これを繁榮せしむるなり。智謀孔明を欺き、辨舌蘇張を欺くといへども、辨舌を揮つて草木を榮えしむることは出来ざるべし。故に才智辨舌を尊ばず、至誠と実行とを尊ぶなり。古語に至誠は神の如しといへども、至誠は即ち神なりといふも不可なかるべき也』と。

げに天地に漲る生命の一貫不息、周流充実、これ即ち至誠である。吾等の生くるは、此の生命の流れに乗托するのである。生命は動くが故に事の発端は多くある。而も動いて息まざるは難きが故に、事の成るは極めて少ない。され

ばこそ

『初あらざる靡し、終あるは鮮し』

とは東西古今の同歎である。而して唯だ至誠の人、よく終始一貫の生活を全うする。終始一貫なるが故に、その生涯は特色ある生涯である。その一生は純一なる一氣の流れである。故に成敗如何を問はず、個性の全面目、煥乎として日月の如く明かである。

## その二

### 功利主義者の下等な胸算用

至誠の人は真人である。真人は一事に専らにして二心ない。その奉仕する一事の何たるかは、必ずしも問ふところでない。利害の打算も無用、結果の顧慮も蛇足である。吾人の至深処より湧き来りて、徐ろに全我を包み去る要求に動いて、蹶起奮躍せんとする時、そもく何の違あつて顧慮打算などして居られるか。古人既に

『才に悠々なれば、便ち是れ志立たず』

と言つた。道念動いて抑へ難く、人情迸つてやみ難く、一切を捧げて奉事せざるを得ぬところに、初めて人格の力と尊嚴とが現れる。

道徳とは一氣の至誠の万殊の現れに外ならぬ。かくすれば斯くなるものと知りながら、已むに已まれず行つてこそ、道徳の権威が生まれるのである。

楠公は湊川に戦死した。或人は敗戦を覚悟して危地に臨める楠公に対して、何故に寧ろこの会戦を避けざりしかと

批評する。南洲は月照と相抱いて薩摩瀉に投じた。或人は南洲が君国に対する責任を打捨て、一時の感激によつて千金の身を軽んじたと責める。乃木將軍は明治天皇の御跡を慕ひ、割腹して御供仕つた。或人は何故に生きて大正天皇に忠勤を励まなかつたかと非難する。吾等は斯くの如き議論を聴く毎に、人生を利害の天秤にかけ道德を功利の物さしで測らうとする彼等の淺猿しき精神に対して義憤を禁じ得ない。彼等こそ一身を賭して事に当らねばならぬ時でも、商人が損得を胸算用するやうな態度で、自家の利害を第一に顧慮する者どもである。

若し其事が利益を齎さぬと見当がつけば、最も適はしき口実の下にその責任を避ける。人を助けねばならぬ場合は、いま助けては却つて当人の為にならぬといふ。而も其人は鞭撻の急に迫られて、いま助けられずば市に腐魚とならねばならぬ破目に居るのである。或は自分の命は一人の為に捨つべき命でないといふ。其の実彼等は何人の為にも命を捧げんとせぬのである。志士仁人は身を殺して仁をなす。然り、水に溺れんとする小犬のためにも身を殺す。かくの如き人にして、初めて万人のために尽し、万人のために死ぬのである。

### 忠実なる敵は虚偽の味方に優る

人生は倫理学の繩墨を以て縛るには余りに深遠である。試みに武王と伯夷とを対照せよ。

一は万民の疾苦を見かねて、起つて君主を殺して天下を救つた。一は万民の疾苦も、以て君臣の大義に代え難しとなし、武王の下に生くるを潔しとせず首陽山に餓死した。時を同じうし、処を同じうして、両者の行動は全く反対に出て居る。而して此の両者が等しく隣邦支那に於いて聖人として尊崇されて来た。その故は他なし、仮令行為は反対にもあれ、ひとしく一氣の至誠の異なる現れであり、その心術に於いて共に道德の絶対性を現してゐるからである。それ故に斯くの如き場合に於いて、吾等の批判の対象となるものは、行為そのものに非ずして、行為の根本となれ

る心術の純不純である、相反する行為といへども、もし共に純一忠誠の心術より出でたるものとすれば、両者並に正しとすべきである。忠実なる敵は、偽り多き味方に優るともいはれるのは、たとへ表面は己れと行動を共にしてゐても、誠を失へる味方に何の尊ぶべきところなく、全然反対の行動に出で、彼れ吾を挫き、吾れ彼を挫かずば止まぬ間柄でも、若し敵にして誠実ならば、其の心術に於いて、却つて肝胆相照らすものがあるが故である。

### そ の 三

#### 道德其のものに大小高下なし

世に小善大善、大悪小悪等の言葉がある。さりながら本質的に考ふれば、道德そのものには、大小もなく高下もない。興世王が平将門に向つて、一國を取るも罪、数國を取るも罪、如かず坂東八州を併せんにはと説いたのは真実である。

一人を欺くは正に万人を欺くと同罪でなければならぬ。結果の大小、範圍の広狭は、悪の悪たる所以を増減するものでない。善の場合も同然である。一國の為に尽くすは、一家の為に尽くすよりも善、千円を布施するは、十円を布施するよりも善と考へるのは、道德の本質とその外面とを混同せる謬見である。

天下の為に尽くすと標榜したところで、心術正しからず、忠誠足らざるに於いては、その天下に貢献するところ、一孝子、一貞婦に及ぶべくもない。デモステネスは、凡て大なること必ずしも善ならず、されど善なることは皆大なりと言つた。されば父母に奉ずるも可、君主に奉ずるも可、天下に尽くすも可、學問に尽くすも可。要はその奉ずる処に純一にして他意なきに在る。一人の爲めなると万人の爲めなるとを問はず、苟も一切をこれに捧ぐる所には、同一な

る道徳的真理がある。

### 道徳の普遍的感化性と至誠

誠を以て一事に奉ずる所に唯一無上が宿る。一心に學問を奉ずる人には、學問が至尊である。一心に父母を奉ずる子には、父母が至尊である。一心に夫に奉ずる妻には、夫が至尊である。すでに至尊と奉じて一身を之に捧ぐる以上、その対象が一人なるにせよ、將た又万人なるにせよ、その精神に於て些の懸隔がない。人々個々の面目、それぞれ芽出度く現はれて、花は紅に柳は緑であるが、而もその生涯を貫くものは、等しく至誠一氣の流である。

一身を一人のために捧ぐればとて、決して私の愛より出るのではない。妻として夫を大切にすからとて、他人に義理を欠くことはない。至誠にして夫を愛するは、私なき精神にして初めて能くする所なるが故に、他に対しても形式こそ変れ、また一味の愛を抱く。それ故に一人にもせよ一事にもせよ、現に一身を之に捧げつゝある人には普遍的なるものがおのづから現はれて来る。即ち形に於ては人の一事に奉じてゐても、実は君臣の道、父子の道、夫婦の道といふ如き、普遍なるものを奉じ、この普遍の道を実現してゐるのである。而してこの事實は、道徳的感化の理を説明すべき關鍵である。

諸葛亮は数百年前の一軍人兼政治家にして、玄德三顧の知遇に感じ、生涯を捧げて彼の為に拮据せる特殊の人間である。然るに特殊なる孔明の生涯が、時を異にし処を異にする万人を感化するのは、一人の君主を奉じて一貫終始せる一生の裡に、一切の道徳の普遍の生命たる至誠が躍動して居るからである。蓋し君をして明君たらしめ、臣をして忠臣たらしめ、父をして慈父たらしめ、商人をして良賈たらしめ、農夫をして篤農たらしむるは、悉く至誠の然らしむる所である。



偉人の感化は、取りも直さず一気の至誠の感応である。故に女子よく男子の模範となり、軍人よく商人の模範となり得る。上田秋成詠じけらく

海原に唯だ一筋の釣の糸のほかに移さじ己が心を

と。願はくは吾も亦至つて尊き一つの為に一身を捧げて他を顧みざる生活を送りたい。

## 情 死 論

情死は誠に人生の最も神秘なる現象の一なり。恋せる男女相擁して自らその命を絶つ。歓喜と悲哀ともて織りなせるその痛ましきところを思ふて、一掬同情の涙あるも可なり。人生の本務を忘れ痴情の為に一命を棄つるとなしてその愚を晒ひ其の非を責むるも可なり。是れ文人詩人乃至は教育家宗教家のなさむと欲する所なるべし。立つ所異なれば観る所異なり、繪ての解釈は悉く是ならざると共に悉く非なる事なし。僕も亦自家の見地に立ちて之が解釈を試みむとするなり。

情死は僕に於て一種崇高なる事実として現はる。之を一の行為と観じて冷かに倫理的判断を下さむとすれば、僕もとよりその不善なるを云ふに躊躇せざるも、情死は単に悪事なりと判定して止まむには余りに深遠なる意義を有す。夫れ男女の熱烈に相恋するや、情人は相互に相互の憧憬する対象となりて、彼等はすでに生命ある一宗教を新たに造れるものなり。而して人生の不如意なる、運命の冷酷なる、彼等を翻弄して其の求むる所を得ざらしめ其の得たる所を失はしめむとす。何人か生を欲せざらむや。たゞ恋を失ひて生きむは彼等に於て全く不可能事に属す。是に於てか相携へて死の影を追ひ蓮華台上長久の契りを夢みつゝあまんじて人生を辞し去る。憧憬の対象に向ひて全心身を捧ぐ、宗教の極致はこれなり。恋人の宗教は情死に於てその極致の形式を具足す。是くの如きもの未だ必ずしも讚美すべき宗教に非ず、情死其ものも亦敢て渴仰に値するに非ずと雖も、人類の神秘的一面は遺憾なく此間に發揮せらる。山上の水、西に決すれば西流し東に決すれば東流す。人心深奥の靈泉八方に迸りて流るるもの、人その一を遡れば遂に神秘の源泉に到達すべし。僕すべて此等の靈川を名づけて宗教と呼ぶ。そは不可思議の力を人に賦与す。カーライ

ルが、人は或る物を信ずるに因りて生く、多くの物につきて論議し討議するに因りて生きず、と云へるもの多小這般の消息を伝ふるに似たり。

宗教は往々にして儀式と混同せらる。三周忌七回忌に法事を営み、日曜毎に説教を聴く者直ちに仏教信者たり基督教信者たりと断ずべからず。専念懸命神仏に帰依し全我を挙げて之に捧げ、常に生命の水を此の泉に汲む事なくば、称号念仏礼拝祈禱は彼等に於てただ一の惰性習慣と成り了し神仏はただ一の哲学的知識と成り了せるものなり。故に基督の言に、夫れわが来るは人を其父に背かせ女を其母に背かせ嫁を其姑に背かせむが為なり、人の敵は其家なるべし、我よりも父母を愛しむ者は我に協はざる者なり、我より子女を愛しむ者は我に協はざる者なり、その十字架を任りて我に従はざる者も我に協はざる者なり、その生命を得る者は之を失ひ我ために生命を失ふ者は之を得べしとあり。読む人或はその激越に失するを危ぶまむかなれども、これ有りて生きこれ無くして死す、かくの如くにして始めて宗教の名に値するなり。某々信者何々信者何々教徒と自ら称ふるの類、十の八はただ某々宗の礼典を墨守し何々教の習慣を遵奉すと云ふに過ぎざるの觀あり。此ところ弁せざるべからず。教会に出入りする人にして若し其心利欲の為に制せられたりとせむか、彼等の神は基督の神に非ずして利欲其ものなり。此時彼はすでに利欲の信者たり。其心名譽の為に制せられたりとせむか、彼はすでに名譽の信者たり。野心の為に制せられたりとせむか、彼はすでに野心の信者たり。此理かの仏前に称号する人に在りても異なる事なし。凡そ一事をなさむとして神仏を呼ぶは、或る事を主として神仏に従となすものなり。溺れむとして神仏を呼ぶは之を以て浮囊視するものなり。其の求むる所は自身の生命に外ならざるを以てなり。挙措行動の仔細悉く神仏の為なりてふ自覚が不断に心奥に湧いて、造次も之に於てし顛沛も之に於てする人あらむには、始めて基督教徒若しくは仏教信者と呼びて可なり。ただこれを能くするは其人甚だ稀なり。職に牧師に在り僧侶に在るものと雖も、此の底の宗教を有するは僅々十に一二を以て數ふ可き歟、余は概

ね自己一流の宗教を信ずる而已。語を換へて言へば神仏以外の或物に帰依し渴仰しつゝあるなり。

斯くの如く僕は心身を捧ぐべき何ものかを有して動搖周旋一に之が為にするものを宗教を有する人と云はむと欲す。満悦憧憬の対象が果して何ものたるかは暫く問はじ、人が或るものに由りて不可思議の力を得來り、全我を之に没入して空間と時間とを超越し去るの一事すでに驚嘆至極の神秘たるなり。而して此の人生の神秘は情死に於て最も普通に現はる。男女相恋はすでに此の神秘の門たり、抱擁情死は此の神秘の堂たり。相恋と謂ひ情死と謂ふ一般に一雙男女間の事實に於てのみ称せらるるも、觀じ来れば僕の所謂宗教は悉く皆な容を變へたる恋愛、姿を更めたる情死に外ならざるなり。但し形式的宗教は僕總て之を存外に置く。

由来東洋に一種壯快の根性あり。会心のことあれば直ちに全身全心を之が為に捧げて一死驚毛より輕し。一知己の爲なる事あり、双親の爲なる事あり、君主の爲なる事あり、或はただ一時の感激に基づいて然るもありと雖も概ね義を以て其の生命となすに因由す。吾國に俠客なるものあり、江戸時代の産なり。弱者の爲に強者を挫き貧者の爲に富者より奪ふ。一旦意氣に感じて起てば利欲榮辱の羈絆を脱却して必死之を果す。其の動くや体面の爲にす。すべてかくの如きは義に恋し体面に恋して之と情死を辞せざるものなり。人生何者かを恋するに非ずんば遂に活生命なし。真正なる前者は皆な真理を恋せるものなり。真正なる道德者は皆な善を恋せるものなり。真正なる芸術家は皆な美を恋せるものなり。彼等はその形式的宗教を奉ずると否とに論なく悉く尊敬すべき宗教信者たるなり。而して天地の真善美に恋し宇宙の絶体を愛するに至りて其の極致に達す。ユーゴーの言に、石とならば磯石たらむ、草とならば知羞草たらむ、人とならば恋人たらむとあり。僕更に附加して、恋人とならば真善美の権化を恋する人たれと言はむとするなり。